

た。ワクチンの効果は絶大なよう
だが、新型コロナウイルス変異株
の脅威もまた大きそうだ。人間界
では、大会組織委員会トップが女
性蔑視発言を機とした内外の批判
により辞任した。直近の時事通信
の世論調査では、再延期・中止論
が6割超あり、国論が二分された
状態はなお続いている。

言葉には力がある、ここまでは
よいだろう。だが、起きてはしく
ない事態「プランB」を考えず「開
催」だけを唱え続ける態度、日本
の政策決定でよく目にする「言葉
対応」は、もはや許されない状況
となった。日本と世界の感染状況
に対応し、科学的知見に裏付けら
れ、科学的検証に堪える施策
が実施できるかどうか。ここに、
開催可否の基準が置かれるべきだ
ろう。この場合の科学的知見は、
公開性かつ共有性が担保されてい
なければならぬ。科学に基づいて
判断がなされた、と内外から信
頼される政治決定が求められる。

開催貫徹「プランA」は、既に組
織委員会によって十分検討されて
いるはずだ。よってここでは、プ
ランB、感染の規模やワクチン接
種の状況に鑑み開催困難となった
時、政治の側が発すべき言葉につ
いて考えてみたい。国論が二分さ
れた状況下、極めて重要な物事が
止められた例を、歴史のインデッ
クスから探してみると、巨大な先
例として、第二次世界大戦最終盤

加藤陽子の 近代史の扉



内外への深い洞察 根底に 「無し許されぬ」五輪プランB」

に当たると気づかされる。

1月に長逝した半藤一利氏は
「日本のいちばん長い日」で、ポ
ツダム宣言受諾による終戦と、天
皇の聖断による降伏が紙一重の真
剣刃渡りだった歴史を描いた。編
集者としての半藤氏の辣腕ぶりは、
本作品が書かれる2年前、同
名の題で挙行した大座談会（「文
芸春秋」1963年8月号）から
も察せられる。45年8月15日正午、
玉音盤によるラジオ放送が流れ
た。ここに至る24時間に関係した
当事者30人が一堂に会した大座談
会中、興味深い発言が見いだせる。

終戦時の海軍作戦部長・富岡定
俊がこう述べていた。終戦の詔書
というのは「実によく出来ている。
（略）『堪え難きを堪え、忍び難
きを忍び』なんていうのは、国民
に対してではなく、軍を対象にし
ているな、と思うのです」。富岡
は36年2月の二・二六事件にあた
って事件を予測し、1週間前から
記録を作成し始めた切れ者なので
余計に注目される。終戦の詔書の

宛名は、徹底抗戦を唱える軍人だ
ったという見立てだ。

終戦の詔書が「実によく出
来てい」たのには理由が
あった。天皇の言葉を綿
密に準備していた人間がいたから
である。詔書起草に関与した者と
しては、思想家の安岡正篤や内閣
書記官長の迫水久常らが有名だ。
だが、早い段階から天皇の詔書に
よる終戦、との見取り図を描けて
いたのは、東京帝大法学部長の南
原繁ら7教授だった。南原らは、
詔書に書くべき言葉を45年春から
練り始めていた。

戦争を終結させるには大義名分
が要る。詔書の言葉のエッセンス
を南原は、海軍一の情報将校、高
木惣吉との極秘会談で語ってい
た。簡単な表現に改めて記せばこ
うなる。いわく、盟邦亡び、自国
のみ戦うは、朕の心に非ず。世界
人類のため、また内に向っては何
民を塗炭の苦しみより救うため、
戦いを止めるのだ、と。実際の終



（左は南原繁）

戦の詔書を思い出してみる。中核
となる論理は、南原の構想に沿っ
たものだった。交戦を継続すれば、
民族の滅亡だけでなく、人類の文
明をも破却する、それは耐え難い
との論理構成がとられていた。

注目すべきは、日本と世界、国
民と世界人類というように、内と
外双方へ向けた深い洞察が周到に
書き込まれていたことだ。終戦工
作は極めて危険なものだったか
ら、南原らは学問的に正確な情報
を集め、的確に分析することで得
た結論を、要路者に上げることだ
けを考えて行動していたという。

これまで述べてきたことは、統
治権の総攬者が天皇であった時代
の歴史である。五輪の中止を言う
のに、政治的権能を持たないはず
の天皇を持ち出そうとするのか、
時代錯誤も甚だしいとの批判も聞
こえてきそうだが、だがそこは誤解
のなきよう。ここで考えようとし
たのは次の点だ。大戦の惨禍をく
ぐって誕生した新憲法で、主権者
は国民と明示された。その我々が、
終戦にあたって南原や天皇を含め
た要路者のなした政治決定の記憶
を継承しておくのは、今後のため
に有益なのではないか。

感染状況が思わしくなければ、
内なる国民と外なる世界の人々双
方の生命の安全を確保しつつ五輪
を開催するのは難しい、こう率直
に言明したらどうだろう。ゼウス
神にささげる宗教儀礼から始まっ
た五輪。生命は契約に優先する、
こう断言できる世は来るだろう
か。